



Title	大阪市大正区における沖縄シャーマニズムの変容 : “カミゴト” と呼ばれる宗教実践の事例から
Author(s)	登尾, 紗帆
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 2019, 53, p. 99-117
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/81501
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

大阪市大正区における沖縄シャーマニズムの変容

—— “カミゴト” と呼ばれる宗教実践の事例から ——

登 尾 紗 帆

キーワード：シャーマニズム／沖縄出身者／カミゴト

1. はじめに

琉球・沖縄文化圏において、ユタ¹⁾ と呼ばれるシャーマン²⁾ (民間巫者) の存在が知られている。沖縄社会におけるユタは、神霊や祖先霊など超自然的な存在との交信にもとづいて、家庭や親族関係あるいは身体の不調などさまざまな問題について判断を下して助言を与えたり、呪術的な儀礼を行って対処したりすることのできる特殊な能力者であると見なされている。

ユタは基本的にその大半が中高年の女性であるとされているが、ごく一般的な社会生活・家庭生活を送ってきた彼女たちがシャーマンとして巫業を営むようになるまでには、ある種の定型的なプロセスが存在するといわれている。彼女らはまず病気や経済的な困難、親族や配偶者との不和というような人生における危機的状態に直面し、それに伴って「カミダーリィ」³⁾ と呼ばれる、神によって引き起こされると認識されている心身の不調 (巫病) を経験する。そしてそれを克服するために先輩ユタの指導のもとで「カミゴト (神事)」の修行を積むなかで、しだいにカミダーリィ状態から回復して心身の安定を取り戻す。そのうち周囲の人々からユタとしての能力を認められるようになり、一人前のシャーマンとして独り立ち (成巫) していく。

ユタのようなシャーマンによって担われる宗教・信仰の形態 (シャーマニズム) は、過去の現象として論じられがちな対象であるが、ユタは沖縄の社会において今なお一定の役割を果たし続けており、その存在は沖縄文化の特

質の一端を担っているといってもよい。ユタをはじめとする沖縄のシャーマンは、民俗学の分野を中心としながらも分野横断的に多様な視点から論じられてきた対象である⁴⁾が、これまで多くの研究者が沖縄でユタに対する調査を試みてきた一方で、この主題について、沖縄から他地域への移住者およびその子孫を対象とした研究はいまだ十分に行われてきたとはいいがたい。大橋〔1998〕や森〔2002〕らの先行研究⁵⁾が、沖縄から遠く離れた土地において、沖縄固有のシャーマニズムの形態やその信仰世界を継承する「ユタ」が出現しうる状況を明らかにしてきた程度である。

ユタとして生きることは沖縄においてなお特異な経験であるが、そうした経験が沖縄以外の土地で持たれる場合、当人にとってその経験はさらに異なる背景や意味を持って受け止められるものだと考えられる。沖縄という土地が日本および海外の各地に多数の移住者・移民を輩出してきた歴史を鑑みれば、沖縄出身者やその子孫たちが移住先の土地で持つ沖縄シャーマニズム的な経験や実践に対しても、これまで以上に関心をもって調査の手が入れられるべきであろう。

本稿では、沖縄にルーツを持つ大阪在住の母娘の事例を取り上げる。筆者は2018年6月2日、9月9日、2019年7月7日の三回にわたって、比嘉良枝さん、比嘉直子さん（両者ともに仮名）に対して合計四時間ほどの聞き取りを行った。良枝さんと直子さんは戦後大阪に出稼ぎにやってきた沖縄出身者の子孫にあたり、両者ともにカミダーリイ的な心身の異常を経験し、「神」⁶⁾と想定する存在とのかかわりや交渉のなかに生きることになった人物である。母親の良枝さんはある人物に師事して沖縄の霊地を訪ね歩く「カミゴト」修行を、また娘の直子さんは「一応は、ユタとして」依頼者からの霊的な相談に応じるというシャーマンもしくはスピリチュアル・セラピスト的な活動を行うなど、さまざまな宗教実践を試みている。それらの実践は、ユタを中心とする沖縄シャーマニズム世界との連続性を持つ一方で、それが本土で行われる際に生じる必要性のレベルで改変を迫られたものである。

沖縄にルーツを持つ個人が沖縄以外の土地で何らかのカミダーリイ的な心

身の異常を経験し、カミゴトを受容することによってその状態からの回復を図るとき、そこではどのような経験が持たれることになり、どのような実践の可能性が出現するといえるか。本稿ではこの母娘の語りを手がかりに、世代間で生じる経験や認識の差異についても注目しつつ、上記の問いについて考察を試みたい。

2. 母娘のライフ・ヒストリー

本稿で考察の対象として取り上げる比嘉母娘は、母親の良枝さんが1952（昭和27）年、娘の直子さんが1975年の生まれであり、両者ともに大阪市大正区の出身である。

大阪市大正区は、沖縄出身者とその子孫が多く暮らす土地として知られている。大阪港に面し、区の三方を河川と運河に囲まれた大正区は近世から大阪の重要な港として知られた地域であり、近代に入ると1883年三軒家地区にて創業した大阪紡績が業績を伸ばし、紡績業を中心に各種工業が集まった大正区は臨海工業地帯として発展した〔大阪都市協会 1983：22〕。地方から多くの労働者が訪れるようになった大正区には、沖縄からも多くの人々が出稼ぎを目的に流入⁷⁾し、しだいに北恩加島や小林のような港湾沿いの低湿地帯⁸⁾に「沖縄スラム」と呼ばれる集住地区を形成するに至った〔上地 2007：1〕。戦後、都市復興事業の一環として実施された土地区画整理事業⁹⁾の進行に伴い、沖縄出身者たちの居住地はしだいに区内の他地域や区外の他地域に分散したが、大正区が本土において最大の沖縄出身者やその子孫の集住地である状況は現在においても変わらない。大正区では住民のうちおよそ四人にひとりが沖縄にルーツを持つといわれており、沖縄料理店や沖縄物産店が立ち並ぶその独特の街並みは「沖縄タウン」「リトル・オキナワ」と呼ばれるほどである。

比嘉母娘の家族が大正区に移住・定着した経緯もまた、大正区がたどった歴史と深く関連している。沖縄から大正区に移入したのは良枝さんにとって

の父母、直子さんにとっての祖父母にあたる世代のことであるが、彼らが大阪に渡った目的もやはり出稼ぎであったという。良枝さんの父親は沖縄戦で腕を負傷し、沖縄で農業に従事することができなくなったために大阪に渡った人物であり、同じく沖縄出身の女性と大正区で家庭を持った。良枝さんの母親は「なんか親に捨てられて」「親の愛情知らんで育ってきたみたいな」恵まれない生い立ちを持つ人物で、やはり大阪に出てきていたところで良枝さんの父親と出会ったという。彼らは当時同区内でもっとも沖縄出身者が多く居住していた北恩加島で生活を始め、良枝さんもそこで1952年に誕生するが、一家は良枝さんがまだ幼いうちに南恩加島へと転居している。¹⁰⁾

「子どものときは……あんまりいい思い出がない」と語る良枝さんは、自分は幼い頃から人とは異なる感覚を持つ、「誰かと常に、見えない人としやべってたみたい」子どもであったようである。そのためもあってか特に母親との関係が悪かったといい、当時の状況を「やっぱり、親に気持ち悪がられてきたから。いじめみたいなものや」と振り返る。当時大正区に沖縄から移り住んできた人々のなかには、ユタ的な能力にすぐれた「カミゴトをする人」もあり、¹¹⁾そのうちのひとりからカミゴトをしなければならないと言われたこともあったが、母親は良枝さんを受け入れず、否定するばかりであったという。

その母親は良枝さんが中学校を卒業してすぐ癌で倒れ、早世する。「悪いけど、ほっとした」という良枝さんは、学校を卒業したのち二十歳の時（1972年）に沖縄出身の男性と結婚し、大正区・泉尾で生活を始める。しかしながら、良枝さんと夫との結婚生活は決して円満なものとはいえなかった。夫とのあいだには三人の子どもを授かったが、子どもたちはそれぞれにアトピー性皮膚炎を持っているなど病弱であった。夫は病院のつきそいをはじめとする育児に対して非協力的で、経済的にも余裕がないなか、良枝さんはひとりで子どもたちをつれてあちこちの病院を回らなければならなかったという。

あまりに子どもの病気が続くことに悩んだ良枝さんは、この時期ユタと思われる人物のもとを訪ねたこともある。そこではふたたび良枝さんがカミゴトをせねばならないことが告げられ、また現状それが果たされていないために子どもの病気が引き起こされているとの説明を受けたという。しかしながら、経済的な困難があったことに加えて夫からもカミゴトに対する理解は得られず、ユタの指示に逆らってカミゴトを拒否することになる。良枝さんはこの時期、精神的にきわめて不安定な状態に陥っているなかでしだいに自殺を考えるようになり、幼い子どもを残して死ねないという思いから子どもたちの首に手をかけるほど追い詰められていたという。

良枝さんの三人の子どもたちのなかでも、特に体が弱く病気がちだったのが1975年に生まれた長女の直子さんであった。直子さんには出生時に心臓の異常が発見されたことにはじまり、喘息やアレルギー、アトピー性皮膚炎など多くの持病があったほか、中学校の卒業前後（1990年）には体内に腫瘍が見つかって入院・手術を経験するなど、成人するまでの年月を通じてさまざまな疾患に悩まされていた。良枝さん同様幼少期から霊的なことに対する感受性が強く、保育園の医務室の窓からそこにいないはずの子ども姿を見たときと語って保育士から精神鑑定を受けるように勧められたり、入院中の病室で壁から出入りする人々と会話ができると発言して良枝さんを驚かせたりと特異な体験を繰り返していたという。

直子さんは高校を卒業して働き始めるが、二十歳のとき（1995年）に癲癇のような発作で急に倒れてしまうという出来事を経験する。この症状は医療機関を受診しても原因が判明しないままそれ以後もたびたび現れるようになり、直子さんが二十代の後半にさしかかるころまで一、二年に一回ほどの頻度で断続的に現れた。長女を出産した二十七、八歳頃（2002～03年）を境にようやく沈静化していったが、その一方「病気と入れかわりで」、霊的な存在・領域に対する感応力はしだいに強まっていったという。出産を経験した一、二年後（2004～05年）には、直子さんは自身が生まれる前にすでに故人となっていた母方の祖母が夢に現れ、語りかけてくるという体験をす

る。その出来事以降、直子さんの「靈感」は「全部がぶわーって見えだして」というほど強くなってはまた弱くなったりと、不安定な状態がしばらく続くことになる。

それとほぼ同時期、良枝さんには、「自分が急に暴れたり」「わけわからなくなったり」というような異常な心身状態が現れるようになっていたという。それまでの良枝さんは、直子さんら子どもたちが幼い頃から不信感を募らせ続けた夫と三十九歳のとき（1991年）に離婚を成立させており、その後十年間ほどは新たなパートナーの男性と巡り会って大正区を離れたり、男性と破局したのち高齢になった父親を看取るために大正区に戻ってきたりと、起伏の激しい年月を過ごしていたようである。良枝さんを突如襲った心身の異常は、「何人かに押さえつけられてるけど、みんな跳ね飛ばす」ほどの激しい錯乱状態を伴うものであったという。

そのような不調が三年ほど続いた頃（2007～08年頃）、良枝さんはついに、やはり大阪で暮らしているある沖縄出身の女性に師事して、カミゴトの修行を行うことを決意する。「神棚」を祀ったり沖縄の霊地をまわったりというこの修行は、三年間ほど金銭を費やして継続したものの良枝さんの体調回復にはつながらず、祀った「神」についても違和感の残る結果となった。師事していた人物との関係も最終的には決裂し、師弟関係を解消することになったという。

それと前後して（2010年頃）、良枝さんの妹が癌を発症する。泊まり込みで妹に付き添い看病をするなか、良枝さんは妹の回復を祈願してカミゴトを再開することを決める。またその頃は、直子さんの「靈感」が、ふたたび強くなりはじめた時期でもあったため、良枝さんは直子さんにも意見を求めつつ独自の判断のもとで新たな「神棚」を用意して祀ったという。

その後良枝さんの妹の病状は奇跡的に回復し、良枝さん自身も心身ともによく安定を得ることができた。現在は直子さんをはじめとする子どもたちと頻繁に行き来しつつ、孫の世話や趣味などで充実した日々を送っているようであり、年来の苦悩からおおかた解放されている状況がうかがえる。一

方自身の「靈感」が不安定な年月が長く続いていた直子さんは、「自分がほんまにカミゴトっていうのをしないといけないのか」と悩み、当時沖縄から大阪に出てきていたユタのもとへ二度ほど助言をもらいに行ったが、2017（平成29）年頃「いちばんきつく、神様がほんって」現れたという経験をきっかけに、自身でもカミゴトを始めることを決意した。良枝さんのように先輩ユタに師事した経験はないが、現在は独自のカミゴト修行を実践しつつ、それと並行して依頼者の求めに応じて霊的な相談にのるという活動を「一応は、ユタとして」行っているという。

3. 比嘉母娘のカミゴト実践と語り

本節では、比嘉母娘がこれまでに実践してきたカミゴトの内容について詳細に検討していきたい。先に述べてきたとおり、比嘉母娘は両者ともに心身および知覚の異常というカミダーリ的な状態を経験したのち、カミゴトを受容し実践するに至ったという経歴を持つ。しかしその実践に対する意識や態度、またそれを実際に行うときの具体的方法は、母親の良枝さんと娘の直子さんのあいだで大きな差異が生じているといえる。その違いがもっとも端的に表れている例として、ここでは両者がカミゴトのために自宅に設置しているという「神棚」について取り上げる。

ここで比嘉母娘が「神棚」と呼んでいるものは、日本本土で一般に知られている神棚とは別種のものであると考えられる。沖縄のユタは巫業を営むために自宅に祭壇を設置する場合が多く、その祭壇は『沖縄民俗辞典』[2008: 538]によれば「クロトンの枝葉を生けた花瓶数個と盛り塩・水・香炉という簡単なものから、中央に千手観音像や神鏡、本土の諸神像を配し、注連縄を張った複雑なものまである」という。良枝さんはもともと以前師事していた人物の指導のもとで「神棚」を自宅に設置したが、直子さんがそれについて「ここに、お不動さんと、千手観音さんとを一对で並べて、で、そっからお供えもんから全部して、っていうやつ」と説明していることから推測する

に、それは『沖縄民俗辞典』に述べられている祭壇の後者に近い、ある程度費用のかかる格式張ったものだったのであろう。

良枝さんは、このような「神棚」を設置してその祭祀を維持していくことには大きな負担があったと述べている。それは「神棚」を設置する最初の段階で仏像や神像を購入しなければならないという金銭面での負担であることはもちろん、大正区のように沖縄から距離的に隔たった場所において沖縄固有の儀礼を行う際に生じる別種の負担でもあったという。良枝さんは、大正区においてカミゴトや沖縄の伝統的祭祀に必要な品物や特に食材¹²⁾を揃えることがしだいに困難になっている状況があるとして次のように述べる。

「自分らは沖縄（出身者の子孫）¹³⁾ やし先祖ごともある程度はやってたけど、今、もうそういう食材がないねん。扱ってる店（の店主）が……年（とって）。じいちゃんばあちゃん。（略）今も（店が）何軒か潰れていてるから、あんまり入ってこおへん」（2019年7月7日）

かつて大正区内には、平尾の商店街を中心に沖縄物産店が数多く立ち並んでおり、¹⁴⁾ 沖縄の親類・知人とのネットワークを持つ一世の経営者が多くの物品を沖縄から卸して販売していたという。その頃はまだ大正区で沖縄の物品を入手することは比較的容易であったが、一世の人々がリタイアし、商店街自体も衰退していくという近年の状況に伴って、沖縄の品物や食材を扱う店舗が減少しているというのである。

一世の人々の高齢化・減少が進行していくこうした状況は、大正区において、沖縄の伝統的なしきたりどおりの儀礼を継承していくことが時とともに困難になっていく現実と避けがたく結びついているといえよう。良枝さんは、「大正区も今度、沖縄の一世じゃなくて、二世、三世、また、四世の世代」として、「だからほんとうの沖縄っていうのがやっぱり薄れてきてる」と述べている。

良枝さんは、こうした大正区の現状に反して沖縄で行われているとおりの

儀礼を執り行うことを要請されることに、大きな重圧を感じていたようである。

「できひんことをああしなさいこうしなさい言われて、しんどくなるじゃないですか。お金がかかることにしろ、ない食材を揃えるにして何するにしたって」(2019年7月7日)

「私らは親の教えが百やったから。逆らうことができなかったから、あせえって言われたらハイって言ってそれをやらなあかん。カミゴトもそう。カミゴトもやりなさいああしなさいこうしなさいこれとこれと、揃えて、こうこうこうで、って言われたって、無理！って私は叫びたい」(2019年7月7日)

伝統的に“正統”な知識を伝授されてもそのとおりにには実践できないという状況に対し、良枝さんは「よけいしんどくなったし、どうしていいかわかれへん。逆らったらどないなんの？って」として、知識を与えられていることであって不安をあおられる状況があったと振り返っている。

一方で、三世の世代にあたる娘の直子さんは、一世の人々が大正区においでかろうじて維持していたものが失われていく過渡期を間近に目撃した良枝さんよりも、さらに沖縄の文化や伝統から隔絶された環境に置かれてきた世代である。伝統的な儀礼を執行するうえでのしきたりについて自分たちの世代は「もうわかんないと思う」と述べる一方で、知識を受け継ぐことに関しては「よけいにそれがいいのか悪いのかっていうところもあると思う」と語るなど、カミゴトをはじめとする沖縄的宗教実践における伝統というものに対して、良枝さんとはまた異なる姿勢を持って臨んでいるようである。直子さんはかつて独自の「神棚」祭祀を考案して良枝さんに勧めているが、このとき直子さんが考え出した「神棚」とは、インターネットから探し出した仏像の画像をプリントアウトして飾るだけのきわめて簡易的なものであっ

たという。

直子さんは、「言うたら、昔のかたちに囚われる？っていうのは、あたしは、しない」として、次のように語った。

「昔は、こんなやから、これを引き継いでいけって言われたところで、それってやったからってじゃあどうなるのっていう。気持ちでええやんって。言うたらそれをやって気持ちがなかったら、それは（伝統とは）違うことをやって、気持ちがあったら（そのほうがいい）って。だからほんまに、あたしのなかでは気持ち。神を敬う気持ち。いつもありがとうって感謝の気持ち」（2019年7月7日）

「日常やってることほど気持ちが伝わることってないし、普段、日頃から使い慣れた言葉ありがとうありがとうって、自分がほんまにありがとうございますって言う言葉と、沖縄の方言でにふえーでーびるにふえーでーびるって言って、なんか、どっちの言葉で言い慣れて、どっちで感謝して言うてるんかなって思ったら、知らん言葉でにふえーでーびるーって言うところで伝わってるんかなとか思うし、そしたら日頃からありがとうございますって言うことが、日頃からほんとにやってることを、気持ちで、表してる。私はだからそれをしていくって。私は、自分のやり方でちゃんと、やっていこうと思ってるし、感謝もちゃんとするって。だから昔のことをしなさいとか、言われてもしませんよって。できませんよって」（2019年7月7日）

上の直子さんの語りにおいては、伝統に則した形式よりも「神を敬う気持ち」「いつもありがとうって感謝の気持ち」を重視する姿勢がとられている。直子さんにとって沖縄の伝統はすでに「昔のこと」であり、大阪における実際の生活感覚にまったく沿わない、従ったところで「気持ちがない」ものになっているのである。また、この「気持ち」さえ「神」に伝わるのであれば、

既存の規範に従って高価な「神棚」や特別な供え物を用意する必要はないという。

「見えないものに対して、モノ、見えるモノって、仏壇とかもそうやけど、あたしは別にいらないうって思ってる。自分の気持ちさえありがたいがあれば。ただ単に、気持ちを紛らわすために、見えるモノを置く。だから神棚も、気持ちを紛らわすために見えるモノを置いて、自分の納得感。ただそれだけやと思ってるから」（2019年7月7日）

「（高価な「神棚」を設置したうえで）月々の行事ごとや何やってなったら、お供えもんもが一ってして、もう、（費用の負担が）どんなやねんって。それは自分を苦しめてのお供えもん。（略）りんごひとつにしたって、自分が一生懸命働いて、今日はこれしかないけど、って、ほんとうにいつもありがとうございますって感謝して、それを置くんか、他にいっぱい借金抱えて、今日は肉こんなにありますよって、はあしんど、神さんもほんまやめてえやって、手を合わせて、するんか。どっちが神様は喜ぶますかって言う。あたしはね」（2019年7月7日）

直子さんのこのような方法論のもとで、「神棚」で神を祀るという実践の内容は、より容易かつ安価な方法へと作り替えられていくことになった。

良枝さんは、以前設置した「神棚」に替えて直子さんの助言のもとで上記のような「神棚」祭祀を行うようになったことについて、以前師事していた人物から非難を受けているとして、そこには今でも葛藤があると述べる。しかしその一方で、「（直子さんが考案した「神棚」は）お金かからへんから、楽」「前はちゃんとした神さん祀ってたけど、なかなかこれできひん。でも今は、プリントアウトされたやつやけど、ありがたいって、ちゃんとできるもん」とも語っている。直子さんから伝統を重視しない新たな価値観と実践方法が提示され、金銭面の負担からも解放されたことによって、「神棚」を祀ると

いう行為自体を肯定的に受け入れられるようになった様子うかがえる。

4. おわりに

本稿では、大阪市大正区出身の比嘉母娘の語りを通じて、沖縄から遠く離れた土地においてユタに類似する人生経験が持たれ、カミゴトの実践が試みられるという事例について検討してきた。ここまで見てきたように、比嘉母娘はそれぞれに大阪という沖縄から遠く離れた土地において錯乱状態や幻視、幻聴というような心身の異常状態を経験し、葛藤を経たのちに最終的にはカミゴトを受容・実践するに至った人物である。両者は一般の人とは大きく異なるものとなってしまった自らの経験を、自身のルーツである沖縄に固有のシャーマニズム世界の枠組みの内部に位置づけ、解釈し、理解しようと試みてきた。カミゴトの実践は、その文脈においては自身に生じた異常状態への克服手段として選択されているといえる。

母親の良枝さんは沖縄出身のユタと思われる人物と師弟関係を結んでカミゴト修行を積んだが、最終的には挫折してユタ／シャーマンとして成巫するには至らなかった。それに対して娘の直子さんは先輩ユタに師事した経験を持たず、カミゴトや沖縄的宗教儀礼に関する知識からもより隔絶された状況にあるなかで、「一応は、ユタとして」依頼に応じて霊的な相談を引き受けるという、いわゆる成巫の段階にまで到達したという点で、良枝さんとは対照的であるといえるだろう。

比嘉母娘のライフ・ヒストリーのうち、特に良枝さんのものは母親と良好な関係を築けなかった幼少期に端を発して、夫との不和、育児における孤独など苦悩の連続といえるものである。カミゴトは幾度となくそうした危機的状况からの回復の手立てとしてユタから良枝さんに提示されるが、良枝さんは金銭面の問題や夫の無理解などの要因から長い年月にわたってカミゴトを拒否し続けた。五十代にさしかかり、意思に反して体が暴れるというカミダリー的な心身の異常を経験してようやくカミゴトを受け入れるに至るが、カ

ミゴトを行ううえでの費用の負担や沖縄から離れた土地ゆえに生じる実践上の困難などから、さらなる苦悩が続くのである。

その一方で娘の直子さんは、「見えないものがみえる」「死んだ人の声が聞こえる」というカミダーリ的な経験ののちにカミゴトを受容したという点で良枝さんと共通する経緯を持つものの、カミゴトを実践するうえでの意識や姿勢そのものは良枝さんとは大きく異なっているといえる。直子さんは、沖縄で従来行われている方法や慣習が自分たちの世代にはすでに受け継がれていないという認識を持ちつつも、伝統の維持や復興に固執することなく、容易かつ安価な実践方法を自ら発案し、実践している。また同時にそれを支える新たな方法論や価値観を生み出すことで、良枝さんにとって重荷となっていた、伝統的な形式で儀礼を実践しえないことへの葛藤を回避しながらカミゴトに向き合っているのである。

母娘間でこのような差異が現れる要因として、第一に世代間の差という要素が考えられる。一世の人々が実践する伝統的な方法に身近に触れながら、それが失われていく過渡期を目撃した世代である良枝さんと、そうした知識の継承がすでに十分になされ得なくなった世代の直子さんとは、沖縄の宗教儀礼の伝統に対する感覚に差異が生じているのである。良枝さんが一世の人々からある程度の知識を伝授され、しきたりどおりの実践を求められることを重圧と感じつつも逆らうことができなかったのに対し、直子さんは知識を十分に受け継ぐことのできない環境に置かれていることでかえって既存の枠組みから解放された状態にあったと考えられる。それゆえに形式にとらわれない自由かつ柔軟な発想を展開して、独自のカミゴト実践を生み出すことが可能だったのである。

また、良枝さんが直子さんの考案したカミゴト実践の方法を取り入れた結果、伝統の強制という抑圧から解放されて以前より肯定的にカミゴトに向き合えるようになっている点も見逃すことができない。人生の危機を克服してユタとして成巫していくまでの過程において求められる、さまざまな費用やしきたりの強制が当人にとって重圧になりうる状況は間違いなく存在してい

る。そうした状況は、沖縄において正統とされるやり方が実践困難な他地域においてはより深刻な問題として、カミゴトに臨む個人の前に現れてくることになるだろう。良枝さんを長く苦しめたものも、カミゴトをせねばならないというユタからのたび重なる勧告と、またそれに反してさまざまな要因からカミゴトあるいは伝統的に“正統”なやりかたでのその実践が妨げられている状況であったと考えられる。それに対して直子さんが発案した簡易な実践方法は、伝統をあらかじめ放棄することで、カミゴトが他地域で実践されるうえで生じる困難の無力化に成功しているといえるだろう。沖縄の伝統的宗教儀礼に関する知識・情報から隔絶されている状況を逆手にとった、新たな実践の可能性がここには見られるのである。

沖縄から遠く離れた地においてカミゴトの実践が試みられるとき、沖縄で伝統的に行われてきた方法の継承は世代が下るとともにしだいに困難になっていく。しかしその一方でさらに次の世代から、その不自由さを克服・超越するような新たな方法が生み出される。そのような世代とともに再編成され、変容していく実践方法のありように、沖縄から離れて試みられるカミゴトの特殊性を見ることができるのである。

以上、比嘉母娘の語りをもとに、大阪市大正区においてカミゴトが実践される事例について考察を行ってきたが、この対象に取り組むうえでの課題はいまだ多く残されている。比嘉母娘は、程度に差はあれ、両者ともカミゴトを受容するまでの過程において沖縄出身のユタと目される人物から直接助言や忠告を受け、沖縄シャーマニズムに関連する知識の枠組みを引き受けてきた。母娘はこうしたユタたちに大阪で出会ったようであるが、その具体的な人物像や大阪で接触するに至った経緯などについては現段階では明らかになっていない。今後はさらに多方面からの聞き取り調査を行い、沖縄と他地域を結ぶユタの行き来やシャーマニズムに関する知識の経路について、より詳細に検討していきたいと考える。

[注]

- 1) 「シャーマン」いう語はもともと、シベリアのツングース社会において存在する呪術宗教者「シャマン」に由来する。当初はツングースの信仰現象のみをさす用語であったが、二十世紀以降世界各地から類似の現象が報告されるようになると、それら全体を包括する普遍的な名称として学術用語化した〔楠 1982〕。現在認知されている「シャーマン」の学術的定義としては、「人びとの求めに応じてトランスと呼ばれる変性意識状態に入ったり“靈感”を駆使して、神霊や精霊、祖先霊、死者霊などと交流しながら、占いや予言をしたり、災いや病気の原因をさぐって祓いや治療儀礼をする特殊能力者とみなされている人物」〔大橋 2004：62〕というような説明が適当であろう。本稿ではこの「シャーマン」という語を、特定の地域の民俗的存在である「ユタ」をも包括する概念として用いる。
- 2) 「ユタ」という名称には、沖縄の社会において歴史的に差別的な意味合いを付与されてきた歴史がある。学術研究の場においても、差別語を学術用語として用いることの不適切さは再三指摘されているが、沖縄においてユタと同一あるいは類似の存在を指し示すのに使用される用語が、地域や差別感情の有無などによってあまりに錯綜している状況から、対象の誤認を避けるためにやむなく「ユタ」の語が使用されてきたと考えられる。本稿でも「ユタ」という名称を使用するが、差別的な意図があって用いるものではないことを確認しておきたい。
- 3) 「カミダーリィ」は、幻視、幻覚、幻聴、夢遊歩行、食欲不振、不定愁訴など、心身のさまざまな不調が複合的に現れる症状である。沖縄固有のシャーマニズムの意味世界の内部では、これは単なる病気としてではなく、神に仕えるべき特別な「ウマレ（生まれ）」であることを当人に知らせるために神や先祖が発する警告として受け止められる〔池上 1999：339〕。
- 4) 大橋〔1998：20-22〕によれば、戦前ユタに触れた研究者はわずかで、伊波普猷と佐喜真興英の名が挙げられる程度であるが、戦後ウィリアム・P・リーブラの『沖縄の宗教と社会構造』（1966）が発表されて以降、民俗学の見地から『沖縄のシャーマニズム』（1973）を発表した桜井徳太郎をはじめ、民族学や人類学、宗教学等の諸分野で多くの研究者がこの対象に取り組んだ。
- 5) 大橋〔1998〕や森〔2002〕が行った研究は、ブラジルにおける沖縄出身者コミュニティにみられるシャーマニズムの事例を調査した例として挙げられる。
- 6) ユタはそれぞれに自分自身が仕えるべき守護神を持っており、その守護神は沖縄シャーマニズム世界における用語でチヂガミと呼ばれる〔大橋 1998：25-

- 26]。比嘉母娘はたびたび「神さん」と口にするが、それもこのチヂガミに類するものであろう。
- 7) 真鍋 [2005 : 88] や林 [2006 : 57] によれば、沖縄出身の出稼ぎ労働者による本土への流入が本格化したのは 1910 ~ 20 年代のことである。特に世界恐慌期の沖縄は、糖価が大暴落したことによって沖縄の主産業である黒糖が大打撃を受け、「ソテツ地獄」と呼ばれる経済難に陥っていた。その影響で多くの人々が県外に流出し、特に工業化が進んでいた大阪に労働者が集中した。彼らが形成した集住地は、戦後にいたるまでそこで暮らす親戚・知人を頼って大阪で出稼ぎ・就職しようとする沖縄出身者たちの受け入れ先であり続けた。
 - 8) 沖縄出身者たちからは「クブングワー（窪地）」と呼ばれた [林 2006 : 57、上地 2007 : 1]。
 - 9) アジア・太平洋戦争中に大きな空襲被害を受けた大阪市では、戦後大阪港を中心にした都市復興計画を構想した。被災市街地に広い道路や公園を配置するため大規模な区画整理事業が行われ、大阪港に面した大正区もその対象となった [上地 2007 : 3]。
 - 10) 良枝さんが幼少期を過ごした 1950 年代は、大阪市が戦後の都市復興計画の一環として推進した土地区画整理事業が進行していく時期でもあった。大正区はもともと土地が低く、たびたび水害に見舞われていたため、市は戦災関連土地区画整理事業と抱き合わせにして大阪港周辺地域を二～三メートル嵩上げする港湾地帯整備事業を実施した。その際、沖縄出身者が特に多く居住していた北恩加島を中心とする当該地区の住民は、住居の移転を余儀なくされた。移転先は 1955 年頃までは泉尾北村町、それ以降は嵩上げ工事が先に終了していた南恩加島が主であった [大阪都市協会 1983 : 140、水内 2001 : 30]。良枝さんが南恩加島に移転したのはまさにこの時期であり、北恩加島地区の嵩上げ工事に際して立ち退くことになったための転居と考えられる。
 - 11) かつて大正区でユタと目される人物が活動していた事例については、村上 [2010] の報告がある。
 - 12) 『沖縄民俗辞典』 [2008 : 58] では、沖縄において神仏や祖霊に供える食品としてウチャヌク（御茶の子）と呼ばれる餅や酒、ミハナ（御花）と呼ばれる米、果物、ウサンミ（御三昧）と呼ばれる肉・かまぼこ・天ぷらなどが入った重箱料理、餅を重箱に詰めたムチジュ（餅重）などが挙げられている。直子さんが「大正来たら、言うたらやっぱりお餅、やな」と述べていることから、餅は大正区でも比較的手に入りやすいと考えられるが、良枝さんは「そのお餅ですら今なくなっせんねん」と語っている。
 - 13) 以下、() 内は筆者による補足である。

- 14) 真鍋[2005: 93]によると、ちょうど沖縄の本土復帰が果たされた1972年頃に大正区の区画整理事業も完了しつつあり、区内の沖縄出身者やその子孫たちの居住地は1980～90年代を通じて平尾および小林に定着した。それに伴って、沖縄出身者が多く暮らす平尾、小林などの地域に沖縄料理店や物産店などの沖縄関連店舗が多く展開したという。真鍋はその後の動向として90年代中盤以降の沖縄ブームによって特に沖縄料理店が増加し続けている状況を報告しているが、十年以上前の論文であるためか、良枝さんが述べるような沖縄物産店が消滅していく現状については言及していない。このような傾向は、真鍋が調査を行った2005年以降に急速に進行してきたものと考えられる。

[参考文献]

- 池上良正 『民間巫者信仰の研究：宗教学の視点から』（未来社）1999
 ウィリアム・P・リーブラ 『沖縄の宗教と社会構造』 崎原貢・崎原正子（弘文堂）1981
 上地美和 「クブングワー」闘争と沖縄出身者「社会」『日本学報』第26号（大阪大学大学院文学研究科日本学研究室）2007 1-18
 大阪都市協会[編] 『大正区史』（大阪区制施行五十周年記念事業委員会）1983
 大橋英寿 『沖縄シャーマニズムの社会心理学的研究』（弘文堂）1998
 楠正弘 「シャーマニズム論の展開」堀一郎『堀一郎著作集』第八卷（未来社）1982
 桜井徳太郎 『沖縄のシャーマニズム』（弘文堂）1973
 林真司 「帝国日本の膨張とその周辺で生きる人びと：ヤマトに移住した沖縄人を手がかりにして」『龍谷大学経済学論集』45（5）（龍谷大学経済学会）2006 53-73
 真鍋一弘 「大阪市大正区における沖縄関連店舗の立地展開」『立命館地理学』第17号（立命館地理学会）2005 87-99
 水内俊雄 「大阪市大正区における沖縄出身者集住地区の「スラム」クリアランス」『空間・社会・地理思想』6号（大阪市立大学文学研究科）2001 22-50
 森幸一 「ブラジルにおける沖縄系シャーマン《ユタ》の成巫過程とその呪術的宗教世界：特にエスニシティとの関連において」 柳田利夫[編]『ラテンアメリカの日系人：国家とエスニシティ』（慶應義塾大学出版会）2002 153-212
 渡邊欣雄[ほか]編 『沖縄民俗辞典』（吉川弘文館）2008

[参考URL]

村上興匡 2010 「科学研究補助金研究成果報告書 沖縄死者慣行の現代的変容に関する地域研究：「本土化」と「沖縄化」の相互作用」

<https://kaken.nii.ac.jp/report/KAKENHI-PROJECT-19520066/19520066seika/>（最終閲覧 2019/1/6）

[付記]

本稿は2019年1月に提出した卒業論文をもとに、追加調査のうえ加筆・修正を行ったものである。また、本稿の聞き取り調査に際して、比嘉良枝さん、直子さんのお二人に多くのご協力を賜りました。仮名ではありますがここに記して、心よりお礼申し上げます。

（大学院博士前期課程学生）

SUMMARY

The Transformation of Okinawa Shamanism in Taisho Ward, Osaka City:
Focusing on a Case of Religious Practice Called “Kamigoto”

Saho NOBORIO

Okinawan shaman, Yuta has been regarded as an important subject for the field of folklore studies, and many researchers went to Okinawa to study Yuta. However, individuals who have brought shamanic practices like Yuta to areas other than Okinawa have largely been ignored despite there being many Okinawan people who came to the Japanese mainland or overseas.

In this paper, I focus on narratives by a mother and a daughter. They were born in Taisho Ward, Osaka City, as the second and the third generation of Osaka-Okinawan. Both of them are particularly sensitive to the spirit world and do religious practice called “kamigoto” in Osaka.

However, they are completely different from each other in the attitude to the tradition. The mother felt compelled to practice “kamigoto” in traditional methods even though she faced many difficulties in trying to do so. On the other hand, the daughter devised alternative methods that enabled to practice “kamigoto” more easily and inexpensively.

When individuals who live in a distant area from Okinawa practice “kamigoto”, they often face various problems, such as economical burdens and lack of necessary goods. These problems inevitably affect how “kamigoto” is performed, but such transformations of this tradition can bring relief to individuals who regard it as a burden.